

▽厚生労働省は、平成 20 年度の概算要求で、このような住民相互の助け合い運動を推進する方針を打ち出し、身近な地域において、住民相互の支え合い運動を促進し、地域において支援を必要とする人々に対し、見守り、声かけをはじめとする福祉活動を活性化するため、地域福祉活動を調整する役割を担うコミュニティソーシャルワーカーを市町村に配置するとともに、拠点づくり・見守り活動等の事業を支援するモデル事業を実施する案を計上した。また、同じく 10 月、社会・援護局長の下に「これからの地域福祉のあり方に関する研究会」が発足した。

▼現在に至る。(2007.11.19)

新しい介護「宅老所」

——介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ

【池田ホーム】が、介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ

自宅の延長線上でケア

地域性と少人数が特徴

在宅介護のニーズが高まる中、介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ

【池田ホーム】が、介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ

【池田ホーム】が、介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ

【池田ホーム】が、介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ

【池田ホーム】が、介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ

【池田ホーム】が、介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ

【池田ホーム】が、介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ

【池田ホーム】が、介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ



池田 隆夫氏

池田 隆夫氏



【池田ホーム】が、介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ

【池田ホーム】が、介護サービスを提供する「池田ホーム」が「在宅」へ

明日は
どっちだ!
COMMENTARY
197

大

学で福祉を学んだ後、社会福祉協議会に就職して、在宅介護をする人たちを支える仕事をしてみました。ほとんどの場合、高齢者本人はずっと、自宅や住み慣れた地域にいたい。家族だって、そうさせてあげたい。でも、家族だけで介護しようとして暮らしてしまい、結局は施設へ、というケースが本誌に多かったんです。

そんなときに出会ったのが、「宅老所」でした。1999年のことです。宅老所は、たとえていえば託児所の老人版で、介護を必要とする高齢者が日中だけ通ったり、短期間泊したりする。特別養護老人ホームのよつないわゆる「施設」ではなく、多くは住宅を使い、家庭的な雰囲気です。

そこで通う高齢者の姿を一目見て、「これだー」と思いました。私はそもそも、「施設」が苦手なんです。障害者や高齢者だけが集められていること自体が自然だし、「施設」で見る高齢者は普通の家庭で見るとは違って見えた。痴呆の方がより痴呆らしく見えた、というんでしょか。それが宅老所では、普通の家庭の普通の時間が見えていて、痴呆の方も一見痴呆には見えなかった。何より、こちらから自分も手を着けるな、と思っただけです。

そこで16年から、特別養護老人

ホームで「施設」を疑える試みを始めました。建物としては、ベッドの並ぶ個室があり、大食堂があり、機能回復訓練室があり、という典型的な「施設」です。開設当初は、100メートルある廊下を痴呆の高齢者が一日中歩き回っていました。特養ではよく見る光景です。でも、施設の中に家庭の雰囲気を感じたスペースを作ったなら、この間まで新しい網で廊下をいれたり来たりしていたおばあさんが、落ち着いてテーブルに座り、笑顔を見せるようになった。

これなら施設を出ても暮らせるんじゃないかと思ひ、隣接する地域に空き家を借りました。高齢者3人とスタッフが1人、日中は施設ではなくそこで過ごさず。これが、「サテライトケア」のはじまりです。特養の周囲に、高齢者をさまざまなにサポートするための「家」を数棟のように作る。高齢者子どもも若者もいる地域のなかでケアするんです。

サテライトでは、施設では聞けなかった「音」が聞こえました。朝には鳥の鳴き声が、午後を時が聞こえた。長年暮らしてきた家と同じような気分で、こんな音を聞きながら暮らすうち、不思議なことに、特養の中では何もできず、何もわからない困った人、とされていた高齢者が、自ら掃除をしたり食事を作ったりお茶を入れたり

高齢者を地域に帰す

子どもや若者がいる住み慣れた地域でケアする。
高齢者に残されていた能力がよみがえる。

池田昌弘

Ikeda Masahiro

東北福祉会「せんだんの社」副社長

1940年、栃木県生まれ。東北福祉大学大学院博士課程修了。全国社会福祉協議会などを経て96年から、社会福祉法人東北福祉会の老人介護施設せんだんの社(古里)の副社長。NPO法人全国コミュニティケアサポートセンター理事・事務局長、全国地域発達支援ネットワーク運営委員などを歴任。

はじめました。

痴呆で会話もできなくなった男性は、誰に言われるでもなく家で土いじりを始めた。家族は、「若い頃、父を見ていたように」と喜んで、面会の回数が増えました。本当はいるけど隠された方があるのに、「施設」がそれを承っていたんだな、と気づかされました。

それだけじゃない。介護サービスが実は、高齢者の、友人や近隣とのつながりを断ち切ってきたのだということも思えてきました。たとえば、高齢者が茶飲み友達に「火曜日と木曜日はアイサービズにいくよ」と伝えても、友達だつて高齢者ですからね。だいたいは忘れて、いつものように訪ねるわけです。行ってもいない。だから行かなくなる。ヘルパーの車が玄関先に止まっていたら、助けた友達に連絡して帰ってしまいます。そんなことが、起きていたんです。

い 50人を7つのユニットでケアしています。職員は、50人を十把一からげに見るのではなく、一人ひとりに寄り添うようになりました。

高齢者が自らの生活圏内に暮らし続けられる仕組みづくりもはじめました。「小学校区」を二つの生活圏と捉え、区ごとにサテライトを作つて、そこで区内の高齢者のケアをするんです。アイサービス

に来る人もいれば、泊まる人もい

る。必要があれば、家にもヘルプに行くし、住んでしまう人もいます。地域の高齢者の介護に関する相談も受け付けています。

ある痴呆の男性は、自宅に暮らしながら施設のアイサービスやショートステイを利用していました。痴呆がひどく、奥さんが介護疲れで倒れてしまった。以前から即、特養へと行ったのですが、彼は自宅から歩いて自分のサテライトに遊び始めた。アイサービスを、状況に応じて泊まるようになり、現在は入居しています。

自分の生活圏は変わらず、近所づきあいそのまま。専門の職員が介護すること、状態も落ち着きました。妻の体調が回復した後は、ときどき自宅に戻ったり、逆に来る孫がサテライトにやってくることもしています。

本人だけではなく、家族も含めて「あるがままの暮らし」にどう寄り添うかが、これからの課題です。特に遠くに離れている家族は、高齢者本人のおかれた様子がわかりにくく、本人の思いをよそに、家族の安心のために早めの施設入居を選択したり、呼び寄せたりするケースが多いものです。しかし、サテライトのような施設を地域ごとに整備し、家族と専門の職員が早い時期から信頼関係を築いておけば、住み慣れた地域に、最期のときまで住み続けられるんです。

聞き手・編集 片桐圭子

都市の座標

人が寄り添い、助け合
いサービスを受けたい。それ以上にならざるも過
こつた密みに適した座
間が用意されたとき、住
民相互の助け合いや在宅
福祉サービスなどほほ
も高まる。福祉には「最
適空間」と
いふ発想が
必要だ。

栃木県足
尾町で高齢

者同士の自主的な寄り合
いを訪ねたことがあ
る。近所のお世に所狭して高
齢者がより添って語り合
っていた。「見聞屋」と
見えるが、これ以上
が聞くと感じ入る。近
ごろの世帯でも、同じ
ような話が聞かれる。親
しく寄り合つたために密
な空間は肌が触れ合ひ
が最適でいふことだ。

五十年待たされた。それ以上にならざるも過
こつた密みに適した座
間。サービスを供給する場
合でも「最適空間」は存
在する。最近読んだ本に「人口

福祉の最適空間

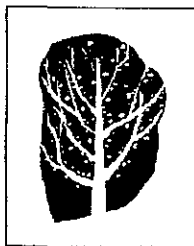
社会福祉法人東北福祉会
「せんだんの社」地域福祉部長
池田 昌弘

七千人くらいが地域ケア
を展開するに最も都合
がよいとデモンマーク人は
考えた。「とある。私も
デモンマークを訪ねた
が、福祉事業所は小さな
地区に分断され、権限も
ばらばらだ。

日本の七千人規模の自
治体で活動する複数の民
間団体の職員から「頭
中の地図上にサービスの
対象となる人たちの顔
をおよそ映し出せる」と
いう話を聞いたことがあ
る。日本
も、この規
模が一つの
サービスを
供給する側
としては最適な最大の
空間とらひことが言え
ない。

現在、仙台市には区
とに五つの福祉事業所が
あるが、七千人規模に機
関が分割され、権限も一
緒に下されれば、市民
にとってほほより最適な空
間ができるはずだ。

同じ団地であっても年
齢構成が異なったり、都
市化の進捗具合によって
意識の違いもあるだろ
う。まずは、地域の事情
に合ったさまざまな「最
適空間」を探し出すこと
が、仙台でも求められて
いる。



カット・大友真貴子

三年ぶりに巨尾町を訪ねた。銅山の盛んな大正期には、板木県内で宇都宮市に次ぐ人口を誇ったが、今はその十分の一。四十人を割って、高齢化率は三五割を超えた。

この町には、異過してしまつたような自然が、住民が中心となって進める福祉サービスがある。そのリーダーを取材してある「A」なるほや「B」なるほやと知らずに驚く。例えば、Aさんの場合(こうだ。自宅を訪ねて来る方に気持ちよく帰って来たため、お茶や漬物を出したり、時には「飯を振る舞うたりしてきた。その結果、Aさんの家には日々、地域の人が集う。悩みを打ち明けられることも少なくない。

池田 賢 弘

Aさんが世話を務めるお不動さんでの茶話会は、昭和三十九年三月から毎月開かれている。参加費は煮詰と称して、入り口に設けられた空き箱に届い思いの額を入れる。額の大小などで他人を批判したりすることは「法度」。公共施設が整備される中でAさんたちは「暇や財が融れ合つてくるとの広さがいい。広々としていると顔が抜けたように感じ、」立派な施設に普及費では行き届く。だから、侮蔑の

どのことではない、と考えてしまつたような些細なことが多い。例えば、段ボールの始末や収集所までの「み出し、今であれば年賀はがきの宛て名書き。Bさんは既に代筆を二人から引き受けているらしい。

巨尾町にはこのようなりターが、小地帯で存在する。共通すること、集う人たちが主役でいられた居場所の提供と、支障が必要なら人へのさりげないの手伝い。他人を批評しながら「

理に合った自然福祉

が唯一の約束ごと。だから、われわれが活き活きとして

随想

外出しなくない」と自宅をお不動さんをお好む。

店を一人で切り盛りしながら、支えの必要な人の見守りをしていくBさんは、「困ったことばないか」とたずねるだけで済む。積極的に働き出さないと本当に困っていることばわからないうと「という。現在、朝夕に訪ねる家が七軒もある。

困っているだけでは、他人に頼り

そこには、制度化された福祉サービスに欠けているものがある。仙台にも住民にみるサービスはあるが、制度化された福祉サービスのわきに追いつけられぬ。住民が主役の福祉サービスとは何かを問い返す時期にきている。

(せんだんの杜・副社長)